

ごあいさつ

小熊 誠(非文字資料研究センター センター長)

非文字資料研究センターは、2008年に創設されてから、今年度で13年目になります。本センターの活動は、3年で一期として活動してきましたので、今年度から第五期が始まります。しかしながら、本センターの前身である21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が2003年度から始まっていますので、非文字資料研究は17年間継続していると言えます。

この歴史は、本センターの変化を示しています。21世紀COEプログラムで設定した「図像」「身体技法」「環境・景観」のなかから、現代における研究課題を系統化するとともに、新設して展開してきました。現在の本センターにおける研究員は、私も含めて多くが非文字資料研究センターとして開設した後のいわば新規の研究員と言えます。この現在の研究員が、本センターの伝統を踏まえながら、将来どのような本センターの方向性を示すのか、まさに本センターの変革が本格化しようとしています。

『マルチ言語版絵巻物による日本常民生活絵引』編纂共同研究は、21世紀COEプログラムから継続している班です。「中国近世・近代における生活・風俗の研究」も伝統的な班ですが、その研究員は新たな方々も多く加わっています。中国の19世紀後半から20世紀にかけての生活・風俗を描いた図像資料を分析します。ヨーロッパ近代の絵引は、第二期から始まりました。「〈メディア〉と〈身体〉から見る20世紀ヨーロッパのポピュラー・カルチャー」として、19世紀から20世紀のポピュラー・カルチャーに研究が展開します。「東アジア開港場（租界・居留地）における都市の発展と建築調査」は、前身から継続していますが、研究員は若手及び新人にも継承され、都市の歴史研究だけでなく建築研究と融合して新しい研究体制で展開しています。「帝国日本」境界の祭祀再編と海外神社も伝統的な班ですが、その研究員は新人も多く、かつ日本と海外の神社調査を国際的に展開しています。「非文字資料の流過程における諸問題を解決するための機械学習やブロックチェーンなどを応用した基盤技術に関する研究」も伝統的であり、画像固有のデータを分析します。最後に、「戦時下日本の国策紙芝居研究」は、第三期から始まった新しい班ですが、2018年に出版した『国策紙芝居からみる日本の戦争』では、第42回日本児童文学学会特別賞及び第3回堀尾青史賞を受賞しており、対外的に高い評価を得ています。未発見の紙芝居資料の発掘を、国内外で展開します。

このほか、本センターは、海外提携研究機関との間で若手研究員の招聘と派遣を行っており、非文字資料研究での後継者養成で成果を上げてきました。この事業は、継承していくことが重要だと強く認識します。

従来の活動を受け継ぐことを念頭に置きながら、新たな非文字資料研究センターを構築することを研究員の皆さんと検討していきます。